臺灣原住民族に於ける數種栽培植物と 臺灣島民族史との關聯

鹿 野 忠 雄

凡そ1地方の民族史の究明は、あらゆる科學の援助によつて爲されねばならぬ。而して生物地理學特に植物地理學が此の問題に關與する役割が屢々大きい事は、既往の研究によつて明である。臺灣島原住民族の移住發展史を闡明するに當つても、我々は彼等原住民族の間に見られる栽培植物の由來を検討する事によつて、他の民族學的方法によつては把握困難な資料を得る事ある可きを秘かに期待して居る。筆者の此の種の研究は僅に其の緒に就いた許りであるが、此處には其の數種に就て述べて見たい。農作物に就ては他日稿を更めて公表する機會があるであらう。

1) パンノキ *Artocarpus communis*

所謂 bread-fruit tree として知られる此の植物は、我がミクロネシアに於て重要な食料植物を爲して居る事は周知の事實である。1説によれば其の原産地はポリネシアなりと云はれるが、未だ明でない。然し此の種はビルマよりマレーシア全體に廣く栽培植物として見られ、東は更にミクロネシア、メラネシア、ポリネシアに及んで居る。

臺灣附近ではフィリッピン諸島に廣く分布して居り、同諸島の住民に栽培せられるものが多い。次に同諸島各地又は各族の同植物に對する單語を挙げれば次の如くである。

Batan 島—— Tipuho

Cagayan 州—— Pakak

Ilocos Sur 州—— Pakak

Ilokano 族—— Pakak

Bicol 族—— Tipoho, Ugob

Tagalog 族—— Kamangsi, Rima

臺灣に於て最も多く此の植物が見られるのは紅頭嶼である。同島の中腹以下の山地又は海岸に見られる事多く、胸高直徑3尺に及ぶものもあり、其の果實は餘り大きくなく、直徑15釐位に過ぎぬ。材は白(Oson) 其の他建築材に用ひられ、果肉は食せられるが、ミクロ

ネジアの如く多くは見られず、其の上石焼き等の調理法は用ひられず、ヤミ族の食料としての位置は云ふに足りないものである。パンノキが紅頭嶼に於て元來自生して居たものであるか否かは俄に斷言出来ないが、民族移動と共に南方より移入された事は充分考へられる處である。ヤミ族は之れを Chipogo 又は Mamuji と呼ぶが、前掲のフィリッピン諸語の中、バタン島の Tipuho, Bicol 族の Tipoho は明に之れに關係ある事を示して居る。

紅頭嶼以外パンノキの見られるのは臺灣東海岸のアミ族である。同族は之れを Aparo 又は Pachidol と呼ぶが、同族の蕃社殊に北部の荳蘭、^{タウラン}薄々、^{ボクボク}里漏、^{リーラウ}壽等には多く、蕃社内の空地には太い此の樹が植ゑられて居るのを見る。而して此の植物が附近の山野には全然見られず、原生林の1員を爲して居ない點を考へるに、パンノキは明に移入植物であつて、恐らくアミ族の祖先が臺灣に移住當時、又は移住後南方との交通によつて得たものである事を想像するに難くない。

2) バンリウガン *Pometia pinnata*

臺灣に於ける分布が丁度パンノキと其の軌を1にするものはバンリウガンである。之れは臺灣の果物として有名な龍眼 *Fuphoria Longana Lam.* とは屬種共に別で、全然異なるものであり、其の木も大きく、果實も大形で、直徑4 糎に及ぶものがあり、多肉で甘味も強い。バンリウガンは馬來半島よりマレーシアを経てニューギニアに分布し、更にビスマーク群島、ニューヘブリーズ群島、サモア、フィジー島にも見られるが、ミクロネシアにはない。北はフィリッピン諸島に多く、パラワン島にも分布して居る。

前例に倣ひ、フィリッピン諸語を挙げれば次の如くである。

Batan 島—— Chai

Mindoro 島—— Malugay, Karunyan, Agupanga

Samar 島—— Alaiuhau

Ilokano 族—— Balambanan, Kabakabat

Agusan 州—— Bantangali

Negros 島—— Ibu, Mansanab

Cagayan 州—— Madalo

Albay 州—— Kogik

Leyte 並に Samar 島—— Quia-quia, Kia-kia

Camiguin 島—— Sidao

Masbate 島—— Takugan, Tigawi, Tugoran

Ticao 並に Camarines 州—— Tigawi

紅頭嶼（本種は火燒島にも産する）に於てバンリウガンは自生して居る。而して同樹は同島樹木の中でも高さに於て首位を争ふ大木を爲し、盛夏の候得られる果實はヤミに取つて最も待ち焦れる嗜好食物であり、材は船其他の建築材に有用視せられる。ヤミは之れを Chai 又は Kamarachigi と呼ぶが、バタン島にて同じく Chai と呼ぶのは兩島の近縁關係を暗示する。

アミ族に於て此の植物が見られるのは矢張り北部地方であつて、前述の蕃社にはパンノキに混り此の樹が植ゑられ、果實は珍重せられて居り、Kowawe と呼ばれて居る。筆者の知る限りに於て、パンノキは北アミ群以外、奇密社、又は都禰社等廣く見られるが、バンリウガンは北アミに限られる様に思はれる。而してバンリウガンが同地方に於て、全く自生なく、何れも栽培植樹に係るものである事を認める時、矢張りパンノキの場合と同じく、此の植物がアミ族の移住と關係ありとの結論に達せざるを得ない。

3) タイトウウルシ *Semecarpus vernicifera*

本種は早田文藏博士並びに川上淹彌氏により紅頭嶼（本種は火燒島にも産する）から同島固有として記載せられたものである。又此の植物が恒春半島に産するとの記録があるが、筆者は之れを見ず、又自生であるか、栽培によるものか、明でない。フィリッピン諸島には同屬の *cuneiformis*, *gigantifolia*, *lanceolata* の3種を産するが、今後紅頭嶼産のものとの詳細な比較研究によつては、同種となる可能性が少からずある。

紅頭嶼（本種は火燒島にも産する）に於てタイトウウルシは山地に自生して居り、ヤミは其の完熟した花托を生食する。又之れを Igas と呼ぶが、フィリッピン諸島の Nueva Ecija, Bataan, Manila, Rizal の諸州並びに Mindoro 島に於ては *S. cuneiformis* を Ligas と呼び、彼我の關係を暗示せしめる。

筆者は曾てアミ族北部の壽社の蕃社内にて、此のタイトウウルシを生垣を以て圍つて居るのを見た事がある。又附近の山野に此の種の自生を見ないから、タイトウウルシも亦パンノキ、バンリウガンと同例に算ふ可きものと思はれる。

4) イトバセウ *Musa textilis*

此の種が1名マニライトバセウと呼ばれ、其の纖維が所謂 Manila hemp 又は Abaka と云はれる事は周知の事である。此の植物の纖維の使用はフィリッピン諸島住民の間では古くより廣く知られて居た様で、MAGELLAN が初めて Cebu 島に上陸した時にも、同島に於て之れより成る衣服が用ひられて居たと云ふ。斯くの如く Abaka の使用はフィリッピ

ン纖維文化の特徴的なものである。E. D. MERRILL によれば、此の植物はフィリッピン諸島の原産であると云ふが、現在では自生は全く見られなくなつて居るらしい。

紅頭嶼に産するイトバセウは、コウトウイトバセウ *Musa textilis* Née var. *Tashiroi* HAYATA として區別せられて居るが、フィリッピン諸島産のものと全く同一である事は想像するに難くない。同島のヤミ族は之れを Abaka と呼び、此の纖維を撚つて各種の綱、網袋 (Karai) を作り、又織つて粗衣 (Tariri-abaka)、船の帆 (Virad-no-tatara)、搖籃 (Rurai-no-kanakan) に用ひる布を得、粗い纖維を以て其のまま Asot-a-abaka と呼ぶ 1 種の cape を作つて居るが、此の植物の自生は見られず、何れも栽培に係るものである。山地の原生林中に見られるので一見自生の如く見られる事もあるが、夫れ等はヤミ族が植栽したものであつて、蕃社附近の乾燥した地よりは、山林中の濕度の高い地に植ゑた方が生育が早いと云ふ。

紅頭嶼がフィリッピンを中心とする Abaka 文化地域に入る事は明であるが、臺灣本島に於ては如何であらうか。筆者は不幸にして之れを知らない。然しながら馬淵東一學士の筆者に語る處によれば、臺灣本島東北部に分布するクヴェラン族の間では、比較的近年迄 Abaka 製の衣服を使用して居たらしいとの事である。然らば此の種の文化が臺灣本島に影響を與へて居る事が想像せられる。

イトバセウの 1 變種は我が沖縄諸島に見られる。夫れは正宗嚴敬學士により記載せられたリウキウイトバセウ *Musa textilis* Née var. *liukiensis* MASAMUNE である。此の植物の纖維より作られた布は即ち同地方産物として著名なる芭蕉布である。此のマ＝ラ麻の 1 變種なる琉球糸芭蕉が沖縄諸島に自生せず、何れも栽培せられるのを見れば、此の植物がフィリッピン諸島より移植せられた事は明である。然し乍ら夫れが歴史時代に於てフィリッピン諸島との間に開けた貿易交通によるものであるか、或は夫れが遙に古代に溯るものであるかは、今筆者の言明する限りでない。

5) 相思樹 *Acacia confusa*

此の樹木は臺灣に旅行した者にとつて忘れ得ぬ印象を刻む有り觸れた植物である。如何なる都市に於ても必ず街路樹として植ゑられて居り、春季には黄色の花が咲く。斯くの如く普通の樹木ではあるが、夫れは何れも移植したものであつて、全島中にて此の植物の自生地が未だ發見されぬ事は、臺灣植物學界の大きな疑問とされて居た處である。臺灣南部の草埔後社附近の山中等リキリキ越道路以南には、他に見ない此の種の大木が見出され、一見自生を思はせるものがあるが、其處を仔細に觀察する時は、夫れが古く植ゑられたも

のである事を了解するは容易である。

臺灣原住民族の焼畑農法に於て、北、中部のタイヤル族とブヌン族は、一旦使用して地味瘦せた畑地にはタイワンハンノキ (*Alnus formosanus*) を造林して地味を肥し、何年かの後再び耕作する。然し南部のパイワン族の1部では、タイワンハンノキの代りに此の相思樹を Chokoji と呼び同様の目的に使用するのである。

結論を先きに云へば、筆者は此の相思樹はパイワン族を構成した或る1部の系統が臺灣に移住當時齎したものであると考へる。此の考察によつて臺灣全島に此の種の自生がない事が説明され、リキリキ社以南に於ける相思樹大木の群立は古い造林の跡地と解釋せられる。事實蕃族の移住に於て、其の農耕の手段に不可欠な植物は之れを携行したものであらう。

然らば此の相思樹の原産地は如何なる地域であらうか。夫れはルソン島であつて、夫れも中部以北の西斜面に多いらしい。而して低位又は斜面の乾燥せる森林の 1 component を爲すものである。而して紅頭嶼、バタン、バブヤン兩諸島に此の樹を見ない點より見れば、フィリッピン諸島よりバタン諸島、紅頭嶼を経たものでなく、此の移動線とは別個に、ルソン島西部より直接臺灣南部に連絡する1移動線を想定する事が出来るものと思はれる。

6) リキリキイモ *Dioscorea fasciculata*

紅頭嶼並びにアミ族に栽培せられる所謂山芋は、ダイジャウ *Dioscorea alata* である。然し乍ら紅頭嶼に於ては、之れとは別に Patan (ダイジャウは Uvi と呼ぶ¹⁾) と呼ぶ山芋の1種がある。之れはヤミ族に於ては極めて古い農作物らしく、Miparos と呼ぶ農作物の豊作を祈る祭祀に於て、粟穂と共に天上の神 Tauruto に供へられる。之れは *Dioscorea fasciculata*²⁾ であつて、フィリッピン諸島に普通なる種である。

然し乍ら紅頭嶼以外、此の種が臺灣本島にて1個所認められる。夫れは前述した相思樹の大木の見られる地域、即ちリキリキ社以南のパイワン族領域であつて、同地方の駐在所員は之れをリキリキ芋と呼んで區別して居る。筆者は之れを相思樹と同じ例として考へるに躊躇しない。

上述せる6種の栽培植物は、臺灣島原住民族の有つ同類の中極めて小部分を占めるに過ぎない。然し乍ら之れ等の植物が提供する意義は重要であると思はれる。而して之れを根

1) 鹿野忠雄—紅頭嶼ヤミ族に於ける粟に関する農耕儀禮、民族學研究 vol. IV, No. 3, pp. 407—420, 1938.

2) 瀬川孝吉氏の示教による。

據として、臺灣に於ける島外よりの文化移動線を想定すれば、次の3を考へる事が出来る様に思ふ。即ち、

1. 第1はバタン諸島（同諸島より以前は此處に省く）より紅頭嶼に連絡する民族移動線であつて、パンノキ、バンリウガン、イトバセウ、更に恐らくはタイトウウルシとリキリキイモも亦、此の經路を通つて紅頭嶼に達したものと思はれる。

2. 第2は恐らくフィリピンのルソン島又は夫れ以外の大島より臺灣の東海岸に直接移住したものであつて、恐らくは紅頭嶼を経由しないものと思ふ。又紅頭嶼に若し接觸したとしても、其の程度は極めて微弱なものと思はれる。此の民族移動の波が火燒島を経由したか否かは明でないが、アミ族1部及びクヴァラン族の口碑によれば、火燒島を指すSanasaiより移住したと云はれて居る。此の經路の移動線に齎されたと考へられる栽培植物はパンノキ、バンリウガン、タイトウウルシ、並びにイトバセウであると思はれるが、此の民族移動波が臺灣東海岸に打ち寄せた地點は、恐らくは1個所ではなかつたと考へられる。

3. 第3は第1、第2の移動線とは全然別個にルソン島、夫れも恐らくは西海岸より行はれたもので、バタン諸島を経由せず、直接臺灣の南部に上陸したものと思はれる。此の移動により齎されたものは、相思樹とリキリキイモである。而して此の經路の移動波が打ち寄せた地點は臺灣南部の西海岸か東海岸かは今の處之れを言明する事が出来ない。

筆者は此處に前述の假説を提起する。今後の發展を見守り度く思ふ。

Some Cultivated Plants of the Formosan Aborigines, and their Relation of the Ethnic History of Formosa

By

Dr. TADAO KANO

Plant geography often occupies an important position in the study of ethnology, and it is not rare that studies of cultivated plants furnish the answers to certain questions of racial migration, cultural contact, etc. In such cases, it is obvious that care must be taken to ascertain whether such plant grows wild or whether it was introduced. In the present state of our scanty knowledge concerning the ethnic history of the Formosan aborigines, it may be useful to consider the original homes and migration routes of some of the Formosan cultivated plants that seem to have some relation to the ethnic history of Formosa. The present paper concerns the following plants:

- (1) *Artocarpus communis*, (2) *Pometia pinnata*, (3) *Semecarpus vernicifera*,
(4) *Musa textilis*, (5) *Acacia confusa*, and (6) *Dioscorea fasciculata*.

of these six kinds of cultivated plants, (1) to (4) are found cultivated by the Ami and Kuvalan tribes, inhabiting the plain on the eastern coast of Formosa. Plants, (5) and (6) are restricted to a narrow area occupied by the Paiwan tribe, S. Formosa.

It is believed that the ethnic groups of southern and eastern Formosa comprise a mixture of a number of tribes from various places, so that it is very difficult to pick out each single element. Upon examining the original localities of these cultivated plants, the writer is led to conclude that, at least, the following three routes of cultural migration from the south existed in the southern and eastern parts of Formosa.

1. That from the Batanes Islands to Botel Tobago (Kōtōsho), in which the Yami tribe is concerned.
2. That from somewhere in the Philippines to more than one centre on the eastern coast of Formosa, in which some groups of the Ami and Kuvalan tribes are concerned.
3. That from the northeastern coast of Luzon to the southern extremity of Formosa, in which a member of the Paiwan tribe is concerned.